



Title	資料編 式辞等
Citation	北大百二十五年史, 論文・資料編, 540-578
Issue Date	2003-02-21
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/28220">http://hdl.handle.net/2115/28220</a>
Type	bulletin (article)
File Information	hokudai125yr_shiryo_540-578.pdf



[Instructions for use](#)

## 式 辞 等

- 一 卒業式における学長告辞（有江幹男学長 一九八二年三月二十五日）…………… 541
- 二 国際交流の推進について（有江幹男学長 『北大時報』一九八二年八月号外巻頭言）…………… 543
- 三 卒業式における学長告辞（伴義雄学長 一九八八年三月二十五日）…………… 546
- 四 卒業式における学長告辞（伴義雄学長 一九九一年三月二十五日）…………… 550
- 五 卒業式における学長告辞（廣重力学長 一九九二年三月二十五日）…………… 554
- 六 北大改革の全体像を求めて（廣重力総長 一九九三年四月六日）…………… 559
- 七 北海道大学創基二二〇周年記念式典における総長式辞（丹保憲仁総長 一九九六年十月七日）…………… 566
- 八 卒業式における総長告辞（丹保憲仁総長 一九九九年三月二十五日）…………… 571
- 九 北海道大学創基二二五周年記念式典における総長式辞（中村睦男総長 二〇〇一年九月二十八日）…………… 574

## 一 卒業式における学長告辞

(有江幹男学長 一九八二年三月二十五日)

残雪を渡る風未だ冷たしとはいうものの、春の息吹き顕著な候となつて、幾星霜親しく共に研鑽を重ねた諸君に栄ある日が到来いたしました。ここに、名誉教授の諸先生をはじめ父兄各位のご参列を賜わり、一二学部二一〇三名、一一研究科四三二名の諸君に対し、それぞれ卒業証書ならびに修士の学位記を授与して、昭和五六年度の卒業式を盛大且つなごやかなうちにも厳肅に挙行することのできましたことは、まことに慶びに堪えないところでございます。

蛭雪の功成り、晴れてこの日を迎えられた諸君は、過ぎし日々を想い、はたまた自らが選択した遙かなる今後の人生を展望して、感傷的情绪と明るい希望との錯綜を覚えておられることと思ひます。蛭雪の「蛭」は、晋の車胤しゃいんが蛍の光の下で書に親しみ、「雪」は孫康そんこうが雪の反射光を頼りとして読書に精進したという故事に則した表現で、いづれも乏しきに屈せず勉強したことを意味しております。蛭雪の功成りと申し上げましたが、必ずしも諸君が金銭的な不如意に耐えて今日を迎えられたという意味ではなくて、多感なこれまでの学生時代を通じ、それぞれに体験されたでありましょう諸般の心の葛藤を克服して、表面的豊かさに捉われることなく、自らの内的向上に努められた成果を讃えたいのであります。雌伏してこの試練に迎え、たゆむことなく幾歳月の間営々の積み上げてこられた諸君自らの努力の積分値に対する証左が、ただ今手に入れられた卒業証書であり学位記であることを北海道大学は知っております。

諸君の本日の慶びは、この日あることをわが人生の目標の一つともして、信じて期待し、喜怒哀楽を越えて諸君の養育に心身を砕かれたご家庭、ご親族の何にも代え難いご満足であると同時に、諸君の多年に亘る研鑽、成長の道程と成果を、現代科学の進展と重畳して見届けることのできた教職員一同の慶びでもあります。若さを尽して今日までの修学を果された諸君の強固なる学究の意志とその成果に対して深甚なる敬意を表します。

私共が集つて生活を営むその集団とでも定義される私共の生きている社会は、人類の生存する限り形成、存続されるものであつて、そのためにこそ世代と共に豊かになるべき英知の蓄積が期待されております。それなるが故に、諸君の今日の栄は、諸君自身のものであることは勿論のこと、諸君の参加を待ち受けている社会の期待でもありません。諸君がいつか学んだ歴史、狭義には日本の歴史、広義には世界の歴史を回想してみてください。かつての歴史を作り出した舞台は大きく変貌し、私共の意識しなければならぬ社会の尺度は、地域的あるいは民族的に局限されていた時代が既に過去のものとなつて、全地球的な規模であるのが現代です。私共の意識の中では確かに存在しながらも、社会は一見漠として把握し難いものです。しかし、個人個人が集合してはじめて形成される集団であることに間違いはありません。よき種子も、よき土壌と相応しき環境なくしては豊かな稔りを期待することができません。豊かな社会を求めるためには、これを構成している単位としての個人の資質向上が不可欠ということになります。無為に群集の中に埋没してしまふことなく、社会の中のよき種子として豊かな個性の涵養を期してください。人口に膾炙かいつされているクラークの銘言は、ここで繰り返すまでもなく、北海道大学で学んだ誰もがご存知の筈です。社会人として誰もが尊き野心を分ち合える社会を天下に希求したいものです。

若く血気旺んな諸君が、わが齢尽きる時あらんことを意識される筈もありませんが、健康にはくれぐれも留意され、緑濃く雪清き北海道大学において私どもと共に学び、よき友と共に体得された学生時代の収穫を基盤として益々英知を磨き、明朗にして逞しき人生の開拓を期して下さい。諸君の赴くところ常に栄光あらんことを祈つて私の告

辞といたします。

(『北大時報』三三七)

## 二 國際交流の推進について

(有江幹男学長 『北大時報』一九八二年八月号外巻頭言)

地球の大きさがわれわれの意識で把握できるようになって以来、國際的な視野をもつことの意義と重要性が、時代の推移と共により多くの人々によって認識されるようになってきていることは、ここに拙論を展開するまでもなく疑いのないところである。

極く常識的に想像してみても、地域的条件を背景として、農耕あるいは狩獵などの手段によって生活基盤の豊かさを求めた人類は、それぞれ独自の文化を形成し、栄枯盛衰の永い経緯を経て今日に至ったものと考えることができる。豊かさを求めるためにはそれなりに英知の蓄積が必要であり、これによる所産は時代に相応した交易などの手段によってより広範な豊かさを生み出し、この結果として得られる安定性を増した生活基盤がより文化的な所産の連鎖的發展を促すこともまた当然の道理である。現代におけるわれわれの現実的体験に則した事実を振り返ってみても、このような歴史的なことを想定するまでもなく科学の發展による生活環境改善の跡は歴然と認識されると

ころであり、文化的な面でも芸術、文芸などは勿論のこと、世界の片隅における出来事に関する情報さえも協力的な意志のある限り全世界が直ちに共有できるような時代になってきている。

自然科学の分野では勾配（グレディエント）という表現があり、ポテンシャルの勾配が各種物理現象における動的活力の根源であることが知られている。当然のことながら、ポテンシャルに差がなければ勾配は生じないし、この差のある点が相互に連絡されていない限り勾配としての物理的意義は存在しない。

人類はその本能の一つとして常に向上を求めている。約四四億といわれ世界中に社会を形成している頭脳と能力の所産と成果に対する評価が意識されるとしたら、これこそ文明あるいは文化における勾配ともいふべきものである。このように考えると、国際交流あるいは国際協力には相反した二面の帰結が想定される。文化的交流の成果にかかわる一面としては、相互の間の勾配を意識することによって活力を求めることであり、他面ではこの活力によって勾配の消滅を助長することである。しかし、人類が常により素晴らしき環境を希求しようとするのが永劫に尽きない限り、この種の勾配が消滅することなしに活力を持続できることは、あたかも熱力学第二法則におけるエントロピー増大の法則に抗する術はないにしても、太陽の生き残っている限り、この世の中に熱的平衡の死の世界は到来しないことと類似している。人類の向上性こそ森羅万象における太陽の存在に匹敵するものであつて、社会における活力の根源であるということができよう。

近時、わが国においては国際協力の重要性に関する議論がとみに盛んであり、諸般に亘る学術分野の国際交流は当然にその重要な一端を担わなければならない。利害得失の域を超越し、基本的には人類の豊かさを求める窮極的基盤として、学術だけは何時の時代にも国際協力の対象となる本質的価値と特性を具備しているからであり、国際交流の必要性は増大こそすれ衰退するものではない。

北海道大学の前身である札幌農学校は、その創立当初わが国でも特異な発展経緯を呈し、明治維新という時代を

背景に一方的な国際交流に端を発している。換言すれば、北海道大学は既にその揺籃期において国際交流の有為性を体験していることにもなる。時代の変遷はあつたにしても、その後一世紀を越える発展の歴史は彼我相互に學術の成果と展望を互恵的に交換できる域に達しており、北海道大学において国際交流の振興に意を致すことは、創立期における意欲的原点の再確認という意義をもつばかりでなく、學術の府としての活力を維持継続して、人類の豊かさ増進に貢献するためのより確固たる地歩を築くことに直結すること必定である。いわば、學術の向上を目的として北海道大学が常に目覚めているための方途を自主的に確立することである。ここで述べようとしていることは、北海道大学における現状が国際交流に関する意欲に欠如しているなどの類ではない。事実、諸般の不自由に耐えながらも相当数の教官が海外における学会活動などに参加しており、また外国人研究者の来訪も年と共に増加の傾向を辿っているし、細い道ながら実力相応に学生諸君の留学などにも意を致してきている。要は、顕在的にあるいは潜在的に温存されている国際交流に関わる意向を的確に掘り起し、これを具現するための全学的意志結集をはかることは如何ということである。

このような意味で、国際交流委員会に対し三項目に就いての諮問を提案したが、幸いにして各位のご協力を得、今日の段階に到達することができた。時に北大百年史編集も四冊目の通説を発売して一〇〇周年記念行事のすべてを完了する機と一致している。時世的な不利は想定されるにしても、既に歩み出している北海道大学二世紀目に対する強力な活力源の一つとして、三浦祐晶医学部長を委員長とする国際交流委員会の答申実現のために、全学を挙げたご協力と各界の理解あるご支援を期待する次第である。

### 三 卒業式における学長告辞

(伴義雄学長 一九八八年三月二十五日)

本日ここに、名誉教授各位、各部署長、教職員並びに父兄の方々のご出席を得て、昭和六十二年度北海道大学卒業証書及び大学院修士学位記授与式を挙行することができましたことは、私のみでなく北海道大学として誠に大きな慶びであります。

本年の卒業生総数は修学六年制へ移行中の獣医学部を除く一一学部二〇九七名、修士の学位取得者は一一研究科の五七四名でございます。

来賓各位におかれましてはご多忙の中をご臨席いただき、卒業生と共に心から御礼申し上げます。

また、この間卒業生をひたすら慈しみ育て、精神的にも物質的にも支えて、今日この最高の学業を卒えさせられるに至ったご父兄並びに周囲の皆様には、それぞれご苦労も多かった事と存じ、感慨また一人のこととお察し申し上げ、心から敬意を表し祝福申し上げたいと存じます。

卒業生諸君並びに修士の学位を取得の皆さん、おめでとunggございます。諸君は本日まで小学校入学以来一六年または一八年以上にわたる長い学園生活を送って来られたのでありますが、明日よりはそれぞれ異なった職場或は研究科へと羽ばたいて行きます。

諸君は人生における最も貴重な青春の時期を我が国の基幹総合大学の一つであるこの北海道大学で過ごされたのであります。

本学は一八七六（明治九）年八月十四日に札幌農学校として開校以来一二年の歴史を持ち、この間日本の教育研究史の上で果たしてきた貢献は誠に大なるものがあると自負致しております。

かつて開校式に臨まれた、ウイリアム・S・クラーク先生はそのスピーチの冒頭で、「排他的鎖国政策から日本が見事に解放されたことは、学生一人一人の胸の内に高邁な志を自覚まさずにはおかない」ことを強調され、またその最後を、本校は北海道のみならず、広く全国民から尊敬と支持とを受ける価値ある大学となることを確信する。」という、高らかな建学の理想で締めくくられたと伝えられております。

クラーク先生の期待に応えて、札幌農学校の第一期生であられた佐藤昌介先生は初代総長として、幾多の困難を乗り越えて本学の基盤を固められました。二期生には「願くはわれ太平洋の橋とならん」という自らのスローガンを実践され、国際親善に尽くし今日、紙幣にまで肖像を残されている新渡戸稲造先生、聖書の良心を生涯貫いた内村鑑三先生、植物学の泰斗で文化勲章受章者であられ札幌名誉市民第一号となられた宮部金吾先生をはじめとする多くの先輩諸氏が本学・本道のみならず、我が国の時代思潮の形成に大きな影響を与えてきたことは忘れてはならない誇るべき足跡であります。

さて今日の大学における教育とはどうあるべきでしょうか？今から二五年前、私は一学生から「先生の講義は就職してからあまり役に立たないと先輩から聞いた。就職したら直ぐ役に立つ講義をして欲しい」といわれたことがあります。これに対して、私は「我々は諸君が将来、自らの道を開くための資となる基礎的な知識、技術、方法論を教えているのであって、就職して直ぐに役に立つ内容の講義をするつもりはない」と答えたことがあります。それから数年後、所謂大学紛争期には、学生の掲示板上に「教授は産業界と結託して就職したら直ぐ役に立つことしか教えない」とあるのを見て驚いたことがあります。

大学とは教官も学生も自ら道を極めることを求めて、「自律」の心を以て事実を追求して止まない魂を養う所で

あると信じております。本学では、各学部、研究科の先生方は諸君にそれぞれの専門領域における最新の知識と最先端の技術を修得させる為に全力を尽くされているのでありますが、大学教育で最も肝要なことはただ今述べましたように、学生諸君が、将来、情報の洪水の中で、自ら進むべき道を見極めて独創的な成果を挙げていくに足る自らの思考力と技術を身に付けることであると存じます。

私は昭和二〇年戦争の終結と同時に旧制度の大学を卒業した者であります。元より高等教育は今日のように普及しておらず、現在の学生諸君以上に社会から恩恵を受けていたのですが、今日の「カウチポテト」の時代と異なりいろいろの面で「ハングリー」であつたと思います。しかし、幸であつたことは、今日のような偏差値で苦しめられることもなく、現在の教養部に相当する旧制の高校では共に切磋琢磨するのには上下はないという考えから、入学したその日から同級生は勿論先輩後輩上下呼び捨てであつたこと、文科生、理科生が入り乱れてディスカッションして、自由に考え、学び、創造することの厳しさ喜びを殊更に自覚することもなく悟らされたことだつたように思います。そのような経験からも私はいろいろな価値観をもつ専門の異なる多彩な友人たちを生涯に互つてもつことのできる総合大学に諸君が学んだことは本当にしあわせな事であつたと思わざるを得ません。これからの人生において、時に道に迷い、時に挫折感に苦しめられることもあると存じます。そのような時、諸君は書齋に戻り、このキャンパスを思い、そこでの友を偲び、新たな勇気を奮い起こして、また実践の場に戻つて欲しいと思います。常に書物に親しみ、自ら考え、反省して、感謝と謙虚の気持ちをもち続けて欲しいと思います。誰にとつても生涯に互つて自らを教育していくことは大切であると思いますが、このことは諸君に求めるだけでなく、私自身はもとより北海道大学四千数百の教職員もまた常に「個性重視の原則」に立ち、画一性、硬直性、閉鎖性を打破して、個人の尊厳、個性の尊重、自由・自律、自己責任の原則を確立する視点から厳しく自己評価し、「基礎研究振興の実」を挙げる一翼を担つて日々「限りなき前進」に全力を傾注して参りたいと念願しているのであります。

さらに、皆さんはこれから日本の中だけでなく世界の舞台で活躍することになります。今日の日本の国際的繁栄に奢らず、異国の文化から真剣に学び、それを尊重する上であくまで、謙虚であってほしいと思います。

我が国は今日まで欧米先進国に追い付け追い越せのスローガンの下で努力して参りました。しかしこれからの我々の進むべき道はもはやそのような考えの中に目標は求められないと存じます。西欧が歩んできた道とは異なった自らの道を自らの方法、思考、技術で開拓して行かなければならないのだと存じます。

どうぞ諸君は国際的な場で、最前線 (frontier) に立つて下さい。そして後ろから遅れて来る国や人の為にドアを開けて待つ気持を忘れないで頂きたい。これからの国際交流では最も大切な心掛けであり、かつ、それこそが本学の誇るべき伝統の一つであったことを想起して欲しいのであります。

最後に諸君が今日手にされた卒業証書または学位記はそれ自体利子を生むものではありません。かつてのように立身出世の特急券でもありません。諸君がどんな困難な事にも立ち向かって行ける勇氣と知的生産力を証明する書き換える要のない永久の免許証ともいうべきものであります。

クラーク先生は別れに際して「Boys, Be Ambitious.」と言われました。しかしここには Boy も Girl もありません。全員 Ladies と Gentlemen であります。どうぞ皆さん、自らを果敢に啓発し、創造への道を求め、謙虚で心豊かな充実した人生を送って下さい。私もクラーク先生とともにこう繰り返したいと存じます。

Ladies and Gentlemen : Be Ambitious,

Be Creative and Be Modest.

諸君のご多幸を祈って饒はなむけの言葉と致します。

(『北大時報』四〇九)

#### 四 卒業式における学長告辞

(伴義雄学長 一九九一年三月二十五日)

本日ここに、名誉教授の諸先生方、各部署長、並びにご家族の方々の御出席を得て、平成二年度北海道大学卒業証書及び大学院修士学位記授与式を挙行することが出来ましたことは、ひとり諸君や私も北海道大学全体の喜びにとどまらず、二一世紀を担う人材をもとめている我が国にとりましても大きな慶事であります。

本年度の卒業生総数は一二学部二四〇八名、修士の学位取得者は一〇研究科の六七三名でございます。

来賓各位におかれましては、ご多忙の中を御臨席いただき、授与式に栄光を添えて下さいましたことに対し、卒業生、修士修了者とともに衷心より御礼申し上げます。

また今日まで、小学校入学以来、実に一六年または一八年以上の長きにわたり、諸君をひたすら慈しみ育て、精神的にも物質的にも支えて、今日最高の学業を卒えさせられた御両親並びに周囲の方々にはさぞ御心労も多かったことと存じ、お喜びもひとしお深いものと心からの敬意を表しお祝いを申し上げます。

卒業生諸君並びに修士の学位を取得の皆さん、おめでとうございます。

諸君は明日より実社会に出られるにしても、また大学院に進まれるにしても、長い人生への旅路の準備を終えるという意味で、本日は諸君の生涯における真に記念すべき日であると存じます。

さて、諸君が成長して来られた年月を振り返ってみますと、一六年前の一九七五年にベトナム戦争が終結し、我が国が経済的に最も伸長した時期であり、諸君は平和と経済的繁栄を当然のこととする青少年期を過ごされた訳で

あります。

ごく最近、新聞に三Kという見出しが出ていたので、周知の「きつい、きたない、きけん」という厳しい学問的習練を嫌う言葉かと思いましたが、そうではなくて国立大学は「暗い、堅い、活気がない」というのだそうであります。国立のKを加えると四Kであると皮肉っております。果たしてそうでありましょうか？

同一年代の約三七%と推定される高い進学率の学生を受け入れるため、現在我が国には約五〇〇校の国公私立大学がありまして、それぞれ特色ある教育を実現するために個性化、高度化、多様化に向けて努力しております。

しかし、入学してくる学生を含めて社会が大学に対して学歴社会に出ていく為のただ「楽しく、明るく、就職に有利な」ことをもって、評価しようとするならば、その結果は自らの人生をもって厳しく証明される結末となることでしょう。

平和しか体験していない諸君に湾岸戦争は多くの問題を投げ掛けたことと思います。今回戦争が終結した時点で諸君の前途を祝福出来ることはせめてもの慰めでありますが、既に「バブル経済」の終焉もささやかれております。充実した人生を希求するにはいかなる道を選ぶべきかを考える好機ではないかと存じます。

今、私が北海道大学の三Kとは何かと問われたならば、「高邁な大志、基礎研究の推進、謙虚で豊かな人間性の涵養」と答えたいと思います。と申しますのは、北海道大学は学生に最先端の技術や知識を授けるために、全力を傾けておりますが、ただそれだけの教育・研究機関ではございません。すぐれた教師の親身の指導の下で、学生諸君が創造力ある学力を養い、いかなる時代の変動に対してもこれを克服できる叡知と強靱な精神力、逞しい実行力を身に付けると同時に国際社会で最も重要な温かい人間性、人としての思いやりの心を育てる場であると考えております。

確かに国立大学である本学の施設・設備は諸君が教育を受け、研究の力を養う場として、経済大国といわれる今

日の我が国にふさわしいものとは言えませんでした。それにも拘わらず、本学からの基礎科学への貢献度は決して低いものではないと自負致しております。

しかし二二世紀に向かつて、我が国からの學術の貢獻に対する世界の期待は益々大きくなってきております。

しかも、今日の我が国の經濟的繁榮を支えている理由は多々あると存じますが、高等教育の充実におうところ大きく、なかでも国立立大学における基礎研究の成果による所、極めて大きいものと考えております。産業界における研究体制の充実は喜ぶべきことでありますが、大学もまた十分な施設・設備を整えて一層の基礎研究の成果を挙げべく全力を傾注して努力して参りたいと存じております。

次に申し挙げたいことは、諸君が人生における最も貴重な青春の時期を我が国の基幹総合大学の一つである北海道大学の美しいキャンパスで過ごされたことであります。

今から三五年前の一九五六年、本理学部動物学科を卒業、修士課程に進んだ一人の学生が旧式のテープレコーダーを持って恵迪寮近くの林の中で野鳥の鳴き声を録音しておりました。彼、小西正一博士は現在カリフォルニア工科大学教授として研究に従事しておりますが、鳥類の行動に関して、生殖行動としての鳴鳥（ミヤマシトドやキンカチヨウ等）の歌の発達と脳神経機構、及び面フクロウ（フクロウ目）の捕獲行動としての音源定位行動と脳神経機構につきまして独自の行動解析方法により多くの新事実を見いだして、数々の国際賞を得られて来ましたが、昨年末、東京において第六回国際生物学賞を受賞されました。私は小西博士の研究への灯が本学で点されたことを殊の外嬉しく存じますので紹介致す次第です。

諸君は本学の学生となられて、講義や実験、読書や課外活動を通じて、はたまた先生や友人との語らいの中から、今まで気がつかなかった新しい自己や家族とのきずなを改めて見いだされたのではないのでしょうか？時には春夏秋冬の季節を美しく彩るキャンパスを逍遙して「都ぞ弥生」を口吟み、小西博士と同様に将来への大きな夢を描き温

めたことでしょう。しかし、時には苦しいこと、悲しいこと、つらいこと等、いろいろあつたと思いますが、この自然の恵みは今日巢立つ諸君の眼底にあつて、生涯、世界のどこにあつても、折りにふれ、諸君を慰め、励ますことでしょう。

更に、総合大学の貴重なところは、いろいろと専門領域の異なる友人と親しく接しつつ、学ぶことが出来る事であります。このこともまた諸君の未来に希望の光を投ずることと信じます。

最後に毎度申し上げることでございますが、本学は設立当初より、W・S・クラーク博士の自由な清教徒思想の影響を受け、国際交流の実践の場となつてまいりました。博士の“Be Gentleman”（紳士たれ）の教えは自由な人間性を發揮し自律的に生きることをもつて、教育の基本方針としたのであります。マサチューセツツ大学は、本学と姉妹関係にあります。彼の地のキャンパス内に本学との友情のシンボルともいふべき「クラーク記念庭園」を造成することとなり、昨年六月、鍬入れ式を行なつて参りました。

このように本学は世界の多くの大学と交流提携を行なつておりますが、国際社会は政治・経済の面で、ますます相互依存の度を深めてきております。資源に乏しい我が国が世界有数の先進工業国となり、いずれの分野をとつてみても、もはや世界の中で孤立して生きていくことは出来なくなつてきております。かつての先進諸国に“追い付け追い越せ”の時代から脱却して、国際社会の中でその地位にふさわしい国際的責任を分担することなしには、発展を続けていくことが出来ないという時代に入つております。

現在本学には三五〇余名の各国からの留学生が在籍しており、本日もドイツから一名、マレーシアから二名の学部留学の卒業生、二六名の各国からの修士修了者が出席されております。これらの方々が本学で学ばれた成果と学内外で培われた温かい友情の絆をもつて、今後国際社会に在つて活躍されますことを祈念致しております。

最後に諸君の長い人生の旅路を乗り切つて行かれるため健康を保持されるよう心がけて下さい。

どうぞ皆さん、謙虚で心豊かなそして創造的な人生を送って下さい。

諸君のご多幸を祈つて饒はなびけの言葉と致します。

〔北大時報〕四四五

## 五 卒業式における学長告辞

（廣重力学長 一九九二年三月二十五日）

本日ここに、名誉教授の諸先生方、ならびに御家族の方々の御出席を得て、平成三年度の北海道大学学位記授与式を挙行することができましたことは、ひとり諸君や私ども北海道大学全体の喜びにとどまらず、二二世紀を担う人材を求めているわが国にとつても大きな慶事であります。

本年度の学士学位取得者は一二学部三三六四人、修士の学位所得者は一〇研究科の七三六人でございます。

来賓各位におかれましては、御多忙の中を御臨席いただき、授与式に栄光を添えて下さいましたことに対し、学部卒業生、修士修了者とともに衷心より御礼申し上げます。また今日まで、小学校入学以来、実に一六年または一八年以上の長きにわたり、諸君をひたすら慈しみ育て、精神的にも物質的にも支えられて、今日最高の学業を卒業させられた御両親ならびに身内の方々には、お喜びもひとしお深いものと存じ、心から敬意を表し、お祝い申し上げ

げます。

あらためて、晴れて北海道大学を卒業する諸君、並びに北海道大学大学院修士課程を修了する諸君、学位を受けられおめでとつございます。

すでにお気付きとは存じますが、「学校教育法」等の改正が行われまして、昨年七月から従来の「学士」の称号は新たに学位に位置づけられました。従つて、これまでの卒業式が、本年より新しく学位記授与式に代わつたのであります。諸君はこの新しい方式の記念すべき第一回生でありまして、卒業証書に代わつて、学位記を授与されたわけであります。

北海道大学は一一六年の伝統をもち、明治九年わが国における最初の本格的大学としてスタートした誇りがあります。ちなみに東京大学は翌明治一〇年の発足であります。北大は、クラーク博士の<sup>Be</sup>gentlemen、いま風にいえば<sup>Be</sup>ladies and gentlemen、でしようか、あるいは<sup>to</sup>high ambition（高邁なる野心）といったキーワードに象徴されるユニークな生い立ちとビジョン、そして永年の実績が示すように、パイオニア・スピリットに満ちあふれた大学であります。この北海道大学を晴れて卒業あるいは修了して新しい人生の門出にたつ諸君、諸君の前途には大いなるチャレンジが待っています。諸君は、二一世紀の担い手として、グローバルな広がりの中で活躍しなければなりません。

では、諸君が活躍する二一世紀とはどんな時代でありましょうか。

私は次の三つを指摘したい。

まず、国際化が一層すすみ、国内の周りをも、外国人の友人が増え、価値観の多様化が一層進むであります。つ。その中で日本文化のアイデンティティがきびしく問われるでしょう。すなわち諸君は日常の生活で、また諸君の子弟の教育のなかで日本文化とはなにかを絶えず問いながら生きねばならない。そのなかで自己を発見し、確認

するためには、日本古来の文化に対する洞察と他国の文化にたいする深い理解をもたねばなりません。

諸君は北大での四年間または六年間の学習を通して、このための基礎を培ったでしょうか。

次に国外をみて、価値観の多様化、利害の対立が顕在化して、国家間、民族間の紛争が一層激化することが充分予想されます。この地球上には多数の民族がひしめいています、それらが一七〇ほどの国家にまとめられているといえます。すなわち一つの国のなかにもいくつかの民族が住み、民族紛争の火種は常にくすぶっていると言わねばなるまい。もちろん国際紛争の可能性も常にあるわけであり、世界の経済の発展と調和 このためにわが国はこれからも責任ある行動をとり続けなければなりません、世界経済のグローバル化によって、二一世紀に生きる諸君は否応なしにグローバルな争いに直面し、積極的に解決を図らねばなりません。

これらの問題解決のための糸口を諸君は北大で会得しましたか。

三つ目ですが、グローバルな問題といえば人口の爆発的増加が危惧されています。現在の五〇億の人口はこのままでいくと、二〇五〇年には倍の一〇〇億に達すると予測されていますが、地球はもはやこれだけの人口を養いきれないといわれております。一方では地球環境汚染の問題があります。これらの事は人類滅亡の可能性すら示唆するものであつて、二一世紀に生きる諸君の責任がいかに重いかを物語っています。もしも人類の存亡が問われる事態になるとしたら、もはや個人の幸福、あるいは家庭の幸福、また一国の繁栄は成り立つ筈もありません。諸君の一人ひとりはそのそれぞれの立場で否応なしにこの問題の解決に立ち向かわねばなりません。

そのために役立つ基礎知識を、行動指針を諸君は北大で学びましたか。

以上、私は三つの問いかけをいたしました。第一は、自国の文化、そして他国の文化への理解について、第二は、グローバルな争いの解決法の模索について、そして第三には、人類滅亡の危惧への対応についてであります。

もしも諸君の母校である北大がこれらの問題について、なにも諸君にインセンティブを与えていない、すなわち

動機づけをしていないとしたら、それは直ちに北大の存在理由あるいは北大の存在意義が問われることになりましょう。そもそも大学の存在理由は、人類の英知を結集して、来るべき危機を予知し、回避して調和を図るための学問体系を創出することにあるからであります。

この三つの問いかけは余りにも重いと諸君は思われるかもしれませんが。あるいは、問題なのはわかるが、具体的にどうしたらよいのか見当がつかない、と言われるかもしれません。

私は諸君につきのことをおすすめしたい。

本日の記念すべき日にあたり、諸君の一人ひとりが北大で何を得たか、いま述べた問題意識の視点から総括してみてください。

高校を終え、北大に入学した当時の自分を思い起こし、現在の自分と比べてみてください。諸君はどう変わりましたか。どんな発見をしましたか。

諸君は新しいトップレベルの知識や技術でいっぱいですか。よき師、よき人生の先輩にめぐりあうことができましたか。多くの友人を得て、友情でいっぱいですか。北海道の美しい四季の変化に培われ、「こころ」も、「からだ」も豊かに成長しましたか。そして心優しくも、しなやかに、バイタリティにとんだ頼もしい若者になりましたか。自分中心の世界を離れて、周りが見えるようになりましたか、しかも客観的に、分析的に見えるようになりましたか。さらにこの地球上に多くの不幸な人々がいることに気付きましたか。そして、このような問題を解決するためにどうしたらよいのかと考えはじめましたか。

おそらく自信をもって答えられる諸君はあまり多くないかも知れません。私はここで性急な答えや結論を諸君に求めているではありません。

北大での四年間あるいは六年間に、北大はずばらしいキャンパスの自然の恵みに支えられながら、心豊かな、詩

情に満ちた、しかしあるときは冬の自然のようにきびしい教え、インプットを諸君に与え続けて参りました。最も感受性に富む青春時代を北大に学んだことの本当の意義は、諸君の人生で年を追うて明らかになります。単に先端的な知識や技術を詰め込むだけなら、諸君は北大で学ぶ必要がありませんでした。知識や技術は、諸君のこれからの生活を支えるために必要であり、日進月歩の現代では絶えず生涯学習によって創出し、更新していく必要があります。しかし、かけがえのない若き日々を北大の自然に囲まれて学ぶうちに、知らず知らずのうちに培われる情操は諸君のこれからの人生に計り知れない影響を与えるのです。あのすばらしい恵迪寮歌「都ぞ弥生」を謳うときに湧きいづる奥深い感動と畏敬の念、二一世紀に活躍すべき global citizen（地球市民）には、単なる知識と技術に加えて、どうしてもこのような心豊かな情操のフレーム（枠組み）を必要とします。幸いなことに、北大に学んだ諸君には期せずしてこのフレームが賦与されていると私は堅く信ずるのであります。

今日の記念すべき日にあたり、私は諸君がたくいまれな「恵まれた若者」であることを強調しました。もっと正確にいうと、たくいまれな人物に成長し、地球市民として二一世紀に活躍するはずの若者たちというべきでしょうか。

そのような若者に私は、故ケネディ大統領が一九六一年の大統領就任式で述べた言葉を贈りたい。

Ask not what your country can do for you,

But what you can do for your country.

（國が諸君になにをしてくれるかではなく、諸君が國になにをすることができるかを問いたまえ。）

この country はあるときには、会社になり、大学になり、あるいは親になり友人になるでしょう。たとえば、親が何をしてくれるかよりも、自分が親に何ができるかを問えというように、であります。大切なのは諸君の一人ひとりが独立心を持ち、自分の目標をしっかりと立てて、ファイトをもって行動することにあります。

二一世紀に活躍する諸君が、北大に学んだことを心から誇りにしながら、積極的に自分の未来を設計し、人類の運命を開拓していくことを衷心より希望して、諸君の旅立ちへの餞はなむけの言葉といたします。

〔『北大時報』四五七〕

## 六 北大改革の全体像を求めて

（廣重力総長 一九九三年四月六日）

北大の改革はすでに緒についた。平成五年から大学院重点化構想の先兵として「地球環境科学研究科」が新設され、平成七年度からは「いわゆる教養部の廃止」と「学部一貫教育」、これに連動して「入学者選抜方式の変更」が公表されている。このような一連の動きの中で、北大は一体どこへ行くところとしているのか、北大改革の目指している最終目標が見えないという声が聞こえ始めている。

この小文はこれらの疑問に答えることを目的としている。実のところ、改革 Reform という表現にはなにか「手直し」というトーンがあるため、私はむしろ「北大革新」Hokudai Innovation、あるいは「北大ルネサンス」Hokudai Renaissance と呼びたい。しかしマスコミが「北大改革」の用語を繁用しているので、「北大の改革」のほうが一般には通りが良いかとも考え使用させていただくことにする。またここで言う「全体像」は個々の改革具体案の細部

を語るといふ意味ではなく、北大の改革の基本方向、あるいは基本理念を語るといふことである。

### 一、北大の初心 北大改革の前提

まず始めに北大の基本的な位置づけなしに改革を語ることが出来ない。なぜなら改革の目標である「北大のあるべき姿」は基本的な位置づけによって左右されるからである。

大学の大衆化、一八才人口の減少、高齢化社会、生涯学習、開かれた大学、情報革命時代などなど、現代の高等教育を取り巻く環境は激しく揺れ動いている。しかし人類がこの地球上で進歩と調和のある生存を続けていくためには、知 (knowledge) (科学・技術を含めて) の開発とともに知恵 (wisdom) の創出を必要とすることは多言を要しない。大学が人類の生存を賭けた「知の拠点」、さらには「知恵の拠点」でありうる限りは、大学の営みはまさしく人類にとって不可欠であり、大学は人類にとって不可欠の公共財生産基地として位置づけられる。具体的には、国民の一人ひとりとは、またグローバルな立場からみて人類の一人ひとは、自らの生存のためにこのような大学の存続を支持せざるをえない。

北大が目指しているのはこのような大学である。それは人類の生存をかけた新しい知や知恵の創出、人知を尽くした研究・創造活動 (バイオニア活動) を第一義とし、それを支える人材の育成を意図するものでなければならぬ。そのための知と知恵の教育はいかにあるべきか。それは文系も理系も包含した全人教育でなければならぬ。それはまた広く地球全体に視野が及ぶ点では、信頼される地球市民の育成ということも出来よう。全人教育と地球市民の育成 (国際化) の二つのキーワードをグローバル化 (globalization) と一括して呼ぶことが許されるならば、北大の教育・研究の究極の目標は、バイオニア・スピリットとグローバル化の二語に要約される。これこそは札幌農学校以来、北大の建学の精神あるいは源流といわれるものであり、建学以来常に一七七年にわた

り嘗々として受け継がれてきた本学の魂である。要するに北大改革の目指す目標は、まず初心にかえること、そしてこの「初心」が二一世紀に新しい翼をえて大いなる飛躍をするための条件づくりをすることに尽きる。それは大学の変わらぬもの（伝統）と変わるもの（創造）の相剋（そうこく）へのチャレンジである。

## 二、自己点検評価

目指すべき目標が設定されたなら、第一になすべき作業は現状の点検によって目標との乖離（かいり）を自ら確認することである。自己点検評価の公表は直ちに他者による評価に結び付く。

この視点から本学は平成二年十月いち早く自己評価委員会を発足し、その後準備委員会の時期を経て、平成四年一月からは北海道大学点検評価委員会（全学、部局別）を発足させて鋭意検討をすすめ、本年六月には第一回報告書が公表される予定である。その意図するところは、教職員の一人ひとりが胸中に本学の初心を強烈に呼び起こし、意識改革によって改革への意欲を高めてもらうことにある。あわせて何をどう変えるべきか、変えてはならないものは何かを識別してもらうことにある。

## 三、北大改革のガイディング・プリンシプル

しかし「海図なき航海」にも似たこの改革をどのような統一視点で進めるべきか。さきに私は一つの視点として「インターファカルティ構想 Interfaculty Organization」を唱道した。この度発足した地球環境科学研究科構想はその具体化の一例である。

北大の発展の歴史をひもとくと、戦後の経済伸張期に次々に学部等が増設され、総合大学の形態を整えたことがわかる。しかしその後の歩みをみると、それぞれの学部はいわば独立した単科大学ともいふべきもので、北大は

単科大学集合大学 Multicollegiate University(クラーク・カーの表現によれば Multiversity、ただしこの場合は多様化・大衆化の意味が強い)の様相を呈してきた。このため教育面でも研究面でも運営上硬直化をきたしていなかったか。例えば、北大という総合大学に入学したにもかかわらず、学生は他学部 of 講義を聴講することは不可能ではないにしても、単位取得は必ずしも容易でなかった。総合大学である北大に入学したことで学生の得るメリットとして具体的何があるのか。他方、研究を遂行する上でも、多かれ少なかれ部局の壁があり、また同じ部局内ですら場合によっては「隣はなにをする人ぞ」の雰囲気か漂っていたように思う。これでは関連分野の研究者が必要に応じて共同研究チームを組むことは容易でない。北大が真の University、額面通りの「総合大学」Comprehensive University しかも個性に輝く総合大学に生まれ変わるためにはどうすればよいか。

私の提案したインターファカルティ構想は、上述のような問題点を解決するために、まず部局間の壁を低くすることを狙ったものである。あわせて、既存部局の壁を越えた新しい研究分野(研究チーム)の構成を狙ったといえる。これ以外にも状況に応じた工夫が必要である。

もう一つのガイディング・プリンシプルとしては既存の学問体系の見直しがある。これには少なくとも二つの方向が考えられる。既存の学問分野が今後とも必須であり、発展が見込まれるとき、さらに効率化するためにどうすべきか。互いに関連する講座が部局を超えて合体するのがよいか(これは上述のインターファカルティ構想に連動する)。また講座の設置形態として小講座制と大講座制のいずれがより適切か。あるいは両者の併用がベターか、などを検討するのが第一の方向。もう一つの方向は、全く新しい観点からチームを組み、新しい学問体系を確立する試みである。後者は成功する確率が低いいため、予備研究班を組織して試行検討しておく必要がある。例えば、従来の文系学問と理系学問は統合できないか。これは知と知恵の接点をさぐる作業となるかも知れない。もし可能としたら、まず手始めはどの分野を対象にすべきか。その場合、学問としての方法論、ディシプリンはどんな

るのか。困難ではあるが、真のパイオニア精神はむしろここにあると思われる。

#### 四、北大改革の四本柱

北大改革のグローバル・デザインの主な柱としては次の四つをあげる。

##### (一) 大学院重点化構想

すでに独立研究科「地球環境科学研究所」が突破口として発足したが、これに関連して水産学部の改組、理学研究科の改組等が問われている。さらに各部局は、北大のレーゾンデートルを主張できるユニークな大学院重点化構想を次々に提案し実現していくことが必須である。いずれの場合でも文部省サイドのチェックは厳しく、かつ大学設置審議会の審査をクリアする必要がある。

##### (二) 学部一貫教育の実施体制

現行教養部（学内措置による）の廃止にともない、平成七年度から新しく「全学教育科目」を実施し、あわせて学部一貫教育をにらんだ教務事務の電算化作業を、新設の「教務事務電算化推進室」を中心に進めること。また平成七年度から実施する「学部別入学者選抜方式」の細部にわたる詰めを行う必要がある。

##### (三) 北大運営組織の改組

学部一貫教育の実施体制の整備とともに、これを主宰する運営体制のあり方、とくに総長補佐制や副学長制の設置が必要になる。

また学生への教育・厚生補導サービス体制の見直しのなかで、学生部のあり方も見直さねばならない。

##### (四) キャンパスプラン

以上述べた北大改革の柱を効率的に推進するためには、それぞれの組織が有機的に作動するインテリジェン

トな入れ物(建物)が必要になる。あわせてこれらの施設設備を学内に配置するためのキャンパス・マスタープランが不可欠である。時代のニーズに応じるための留学生センターや学内環境保全センターの新設も必要である。すなわち、北大の誇る美しい自然環境を保持しながら、新しい時代のニーズに応じるキャンパスづくりが求められている。

## 五、人材の育成と活用 新北大方式

いま手掛けつつある北大改革は北大のあらゆる面に及ぶ抜本的改革、いわば「北大のルネサンス」を意図したものである。すなわち、北大の二世紀目の充実と発展を確実なものにするため「生まれ変わる」というのである。

しかし、この度の北大改革がいかに大がかりな変革であっても、北大改革の「初心」は組織改革そのものによって達成されるものではない。国民のため、人類のための知的公共財産を創出することによって、知の拠点、あるいは知恵の拠点となり、人類の歴史に誇るべき地位を占めたいという北大改革のための初心、これこそ「高邁なる野心」と呼ぶべきであるが、この野心の達成の成否は最後は人、すなわち人材育成の如何に掛かっている。北大に集う若者たちのバイタリティと新しい教育組織と教育内容ならびに教職員の協力と意欲が問われている。

希望に胸を膨らませ全国から集いくる若者たちの頭脳に、このような高邁なる野心をインプリントするために、教官はどのような教育をしなければならないのか。教職員はどう行動し、範を垂れるべきであろうか。この点で我々は建学当時の札幌農学校に好個の模範をみる。農学校という専門教育の場で、どのようにして全人教育が行われ、その結果多くの国際人(グローバル・シティズン)が巣立っていったか。ここでも北大人は初心に学ぶ至福を味わうのである。

もちろん、好むと好まざるとにかかわらず、北大も「大衆化」の大海を被っている。そのなかで「初心にかえる」

ためには相応の工夫を必要としよう。小人教教育はどの様に可能であろうか。学生に独立独歩、自立して学ぶことの喜びをどう把握させることができようか。そのような教育を実りあらしめるには、教官自身にまず充足感がなければならぬ。教官としての自信と充足感はどのようにして育まれるのか。

教官がもつとも活動に富む時期に、効率よく実力をフルに発揮できる組織とはいかなるものか。教育と研究（医系ではさらに診療）の重荷に堪えながら、教官が自分の未来に夢を託せるシステムはいかにあるべきか。いま計画している北大の改革はそのためにベストとはいえなくても、ベターであろうか。

現実には、大学院重点化の推進と学部一貫教育の採用によって新しいカリキュラム、これには大学院教育と学部専門教育、さらに従来的一般教育課程等教育（いわゆる教養教育）の三者が含まれることになるが、これらを一貫教育の課程のなかでどのように組み込んで行くか、またそれらを担当する教官スタッフの配分をどうするかが焦点の急を要する問題である。原則として、大学院重点化により、すべての教官は大学院に属し、学部教育は学科兼担の形を取るようになる。この際一般教育等を含めた学部教育は全学の大学院教官でシェアすることになる。しかし研究と教育のレベルを維持し、さらに向上させるためには、私がかつて提案したARTSシステム（「北大における一般教育のあり方 新しい北大方式を求めて、北大教養課程教育協議会資料集、五五号、平成四年十二月十日）、あるいはこれに代わる新しい教官人事方式の採用が必要になるであろう。

北大のルネサンスを実りあるものにするために、ここでも我々の叡智と行動力が問われている。

（『北大時報』四六九）

## 七 北海道大学創基一二〇周年記念式典における総長式辞

(丹保憲仁総長 一九九六年十月七日)

今日此処に、文部省井上次官、京都大学井村総長、室蘭工業大学荒川学長等の教育界を代表する皆様、堀北海道知事、札幌幌市長等の地元を代表する皆様のお来臨を得、名誉教授の諸先生、日本各地からお集まりいただいた同窓の皆様、ならびに、教職員・学部学生・大学院学生・留学生の代表の皆様と共に、北海道大学の創基一二〇年を祝う事の出来ますことを誠に欣快に存じます。

我が北海道大学は、明治九年（一八七六年）八月十四日、黒田清隆開拓長官、ウィリアム・S・クラーク先生の下に、日本最初の大学である札幌農学校として発足し約三〇年を経てから、東北帝国大学農科大学の約一〇年、北海道帝国大学の約三〇年の時代を経て、第二次大戦後の北海道大学の約五〇年を加え併せて一二〇年の歳月を閲したことになります。

此の一二〇年は、日本が東海の閉ざされた空間から西欧列強が支配する広い世界に打って出て、自己の生存をかけて必死の努力を続け、漸く近代文明の中で生きていける国となった年月でした。近代の光と陰を共に厳しく経験しつつ今日に至っています。

札幌農学校が創立され、様々な西洋文明がそこを窓口として新開の北海道に流れ込み、日本古来の魂から立ち上がった近代精神がそこから日本の隅々へと広がって行きました。佐藤昌介、新渡戸稲造、内村鑑三、宮部金吾、広井勇はじめ日本の近代精神と学術の祖となった多くの人々が、クラーク先生の *Boys be ambitious* の教えの下に育つ

ていきました。この時期には、札幌農学校と翌一八七七年に発足した東京大学の二つしか日本には大学がありませんでした。

北辺の地に過ぎたるものとして、札幌農学校は幾たびか存亡の危機に立たされましたが、初代総長佐藤昌介先生、新渡戸稲造先生その他の諸先輩のご努力と、各界のご支援で幾多の困難を乗り越え、Be ambitious をモットーとして日本の近代をリードする一二〇年の歴史を重ねて、北海道大学はわが国の基幹総合大学の一つとして今此処にあります。

概数で申し上げますと、現在、学部学生一万一〇〇〇人、大学院学生四五〇〇人、短期大学部学生六〇〇人、その他学生九〇〇人、総計して一万七〇〇〇人の学生が学んでおります。更に約五〇〇〇人の留學生がおります。

第二次大戦で多くの卒業生を失った痛恨は、近代化の流れの中でアジアの各地に及ぼした様々な反省すべき過去と共に、今尚消し得ぬ歴史であります。理工系のみ北海道大学に法文系の学部を造ろうとして、戦後の困難な時代に、みんなで鉛筆を売って図書を整備しようとした教官・学生の努力の跡を尊い物と思います。また荒れ狂った大学紛争が、人心の荒廃の中に終焉していった苦い教訓を忘れるわけには行きません。歴史の中で多くの反省すべき事柄があつたと共に、たたえるべき多くの業績が重ねられました。みんなで考え、汗を流し、それぞれの理想を追った此の年月を大切な物したいと思います。その間、約九万人の学士、一万八〇〇〇人の修士と一万四〇〇〇人の博士を世に送り出して参りました。

今、地球が隅々まで見通せる時代となり、蔓延りすぎた人間が自制しながら成長型の近代文明を卒業し、共生型の、近代の後に来る成熟した文明に軟着陸しようとしているときに、共生すべき大自然と未だ持っている此の北海道に位置する基幹総合大学として、また日本の近代を自らの手で開いた札幌農学校の末裔として、新たな Be ambitious を閉塞しつつある近代の脱却と新しい文明の創成のために燃やしたいと思います。一二〇年前は、新たに開

かれようとする北海道を拠点として、日本近代化の先駆者たらんとする野心でしたが、今度は、地球環境の時代の厳しい条件の下での新しい文明の創成を、身動きの取り難くなった近代の超過密中心と距離を置き、自然を未だ持つ北海道を発信地として、自らの手で健全な形で造り上げていきたいとする、創造的な Ambitious です。

近代という、多くの地球人にとって成功したと思われる文明を捨てて、新しい生き方を模索するのは容易な事ではありません。成功した文明であるが故に、近代を超えて新しい生き方へ転換するのは極めて難しい事です。加えて、転換に使うことの出来る基礎的な知識は、近代文明を閉塞にいたらしめた近代科学技術の基礎知識その物であるという、困難な状況にあります。地球環境の閉塞という絶対的な制約条件を常に頭に置いて、人と人が、また、人と他の生物が常に支え合ねばならない共生型の地球社会を造り上げていくために、現有知識を複合的・融合的に活用して縦割り型の近代社会の無駄を消去し、先端的な知識の創造によって、新しい共生型システムの効率化と高度化を一層進めて行くことが我々の仕事となるであろうと思います。

その為に、北海道大学は、今大きな改革を進めています。その中心を成す改革の構造は次の三つに要約できます。その第一は、組織の重心を大学院へ移し、研究者・大学院生が創造的な研究を進める発信型の研究大学を創り、世界と競い地域社会の核となることです。日本は、学びとつた近代化の成功で先進国の一つと成りました。此の次の時代には、自ら創り出した基本的な原理と倫理を引っ提げて乗り出していくのでなければ、国際化の進む地球社会の中で、確かな地位を占め続ける訳には行かないでしょう。無策に過ごせば、経済的インバランスに苦しむ日本が次に遭遇するかもしれない困難は、逆の形で、知的生産のインバランスによる国際間のせめぎ合いの弱者に成ってしまうかもしれません。大学院レベル以上での先端的・戦略的な創造的研究体制を速やかに確立することが基幹総合大学の一つである本学に求められております。

第二は、基礎を重視した学部四年一貫教育をシステムテックに造り上げる事です。総ての行動を地球環境制約の

下に考えていかなければならない新しい世紀の諸課題に、自らの力と倫理で立ち向かい活躍しつゝる「学部学生」を育てることです。その為には、産業別とも言える形で構成された、伝統的な学部・学科方式による高等教育を複線化・融合化することが重要であると思います。産業小分類のような学科毎に、定食型の専門教育をしておいて、一般教養教育が大切であると言っても、なかなか成果が上がりませんでした。教養部を廃止し、学部四年を一貫化した大きな理由です。今進めたいとしている北海道大学の学部教育では、学部教育に関わる専門の幅を可能な限り広く柔らかく考えて、それらの学問にどうしても必要な専門基礎を精選してしっかりと学ばせ、体系的に準備された骨太の教養科目群を各学部の協同で全学的に提供し、学生が自己を充分に表現できるまでの言語・情報教育をしつかりと行いたいと念願して居ります。人と自然に常に語りかける事のできる学生を、此の北の大地で育てたいと念願しております。

第三は大学と社会との能動的な連携です。札幌農学校の実学の伝統は、育かれた地域の人々や産業への貢献の大切さを教えています。帝国大学の大学が疎かにしがちであり、時としては否定した時代さえあつた事柄です。今や世界に通用する本當の学問を、自らの手で地域に発して創らねば成らぬ時に成りました。本学はこの春、先端科学技術共同研究センターを発足させ、共振的な関係を持つことの努力を開始しました。大学を共同体の核として世界に通用するものを創り出して行かなければ、北海道はフロンティアという名の世界の片隅に成ってしまうでしょう。バイウエイ・オブ・トーキョーでない学問と技術を自ら生み出せるかどうかが我々の肩に掛かっています。先立つ時代、文明が転換した一九世紀の初頭、ヨーロッパのはずれのスコットランドに、世界を一変させる産業革命をスタートさせた、多くの文物が生み出されたことに思いを致したいものです。今、共生の時代へ向かつて文明を転換させることが教育・学問の目的となりつつある時代に、自然豊かな此の地で、近代の一二〇年を学び続けて来た本学の歴史の上に、我々が何をなせるか、何を成すべきかを広く考えてみたいものです。

また、知識の陳腐化の速度が速く、学問の基礎さえ変転するこの時代に、大学卒業後に学び返すことの必要性は急速に高まって来ると考えられます。本学は、実経験を経た社会人に正規のカリキュラムを提供する事を大学機能の重要なものとすべく準備を始めました。何が必要か、何を知らないかを本当に判った上で学ぶ道を創り、経験を経た学生が加わるシステムを考えることによって、大学の教育研究のリアリティも高まり、一八歳の春が人生を支配することからの脱却の議論も進むのではないかと考えます。人間の経験を越えた処まで自然科学・技術は拡大し、先端化し高速化しています。バーチャルな世界は、リアルな世界を持ち得る人間にとつてのみ価値のあるものであり、その逆ではない事を教育の場では大切にしたいものです。

五年後に来る二一世紀初頭までに、次ぎの世紀に於ける北海道大学の教育の理念と方式を現在の努力の延長上に確立し、学部・研究科の基本的な施設・設備の整備と高度化を進め、学部・研究科の基本組織を超えて複合的・融合的な高度の研究を行う場を工夫し、緑豊かなこのキャンパスを人と生物が共に生きる世界を模索する学問の場と実感できるものに整備し、一二〇年の歴史の中で先人が遺してくれた遺産を新たな飛躍の為の資源として研究博物館化し、教育・管理・運営を支援する大学の様々な営みを組織化するなど、大学の変革と個人の活動を容易にする様々な施策を具体的に進めて行きたいと念願しています。

文部省を初め関係各位のご指導ご支援と、大学の教職員・学生の皆様のたえざる研鑽をお願いして、ご挨拶と致します。

## 八 卒業式における総長告辞

(丹保憲仁総長 一九九九年三月二十五日)

北国に春の兆しが訪れつつある今日ここに、名誉教授の諸先生始めご家族の皆さまなどのご参会を賜り、北海道大学札幌キャンパスの一一学部二二二六名の新学士と九つの大学院研究科一一六六名の新修士の諸君に、人生の刻みが一つ進んだ証として、それぞれの成果に対して学位記を授与し、新しい世界への門出を祝うことができることを誠に欣快に存じます。またこの日まで、我がこととして、諸君の学業を経済的にも精神的にも支え続けてこられたご家族・知己の皆さまのご満足はいかばかりかと存じ、ご同慶にたえません。

今日、学士の学位を授与された諸君は、小・中・高等学校、大学と、中には他の経験をも経て、営々と努力を重ね、社会の或る分野で働くことができるであろう新人と認められた人々です。また、修士の学位を得られた諸君は、更に大学院二年の専門課程を踏み、ある職業分野で活動することができる専門家として期待されている人々です。様々な人生の岐路の一段階を越えて、新しい世界に目をこらすことのできる新しい足場を持ち得たことに心からお慶びを申し上げます。今日の諸君の成業があるのは、諸君の努力もさることながら、小学校以来この月年まで諸君の学業をご指導くださった、数多くの先生方のご尽力のあることを忘れてはならないと思います。

諸君は一九〇〇年代にこの大学を巣立って行く最後の学生です。今日差し上げた学位記は、新しく制定された和文学位記とその公式英訳を一組とする新様式のものです。来る二一世紀の皆さんの活動の場が地球規模のものであることを考え、君たちの先輩の九万二〇〇〇人余りの学士、二万三〇〇〇人余りの修士諸君が受けた卒業証書や

学位記と様式をいささか変えることとしたものです。

時代が大きく変わろうとしている今、考えるべき条件や対処すべき要素は極めて多様でかつ厳しくなつてきています。地球環境の容量限界が化石エネルギー、食糧、熱汚染等の問題で明らかになり、人と人の適切な距離がとれないような過密地域が増えてきています。比較的簡単な知識と操作で運用できる程度のレベルにしかない近代の殆どの技術や社会組織は、それを有効に作動させるためにはそれぞれの目的に応じた専用空間を必要とします。近代の縦割り社会の成立の理由です。大量のエネルギー消費と高速大量輸送技術の助けを借りて、それぞれの縦割型の専用空間を大型化・効率化し、その結果として地球を産業毎に分割して、近代社会は大きな成長を遂げてきました。その結果、産業も行政もそして教育も縦割型で推移しました。つい最近までは、大学の定型的な課程を数年間学んだ程度でそれぞれの分野で専門家として世に出ることができた理由であるうかと思えます。地球環境に余裕のある間は、個々の産業を拡大する形で成長する経済に支えられて、様々な矛盾も顕在化せず、人々は便利な生活と心身の自由を獲得することができました。その条件が地球環境の制約に遭遇して今失われつつあります。

近代の閉塞を逃れるために我々が当面使える知識は、近代を閉塞に導いた科学技術の基本しかないというパラドックスに直面しています。産業縦割型の社会を脱し、量的成長を求める社会の価値観を卒業して、より本質に近い人類の必要を求め、それを満たすための様々な活動を、より少ない資源・エネルギーと空間の利用で果たせるよう、技術や社会の仕組みを複合化・融合化する創造的な考え方を作り出すことが今求められています。

文系と理系を判然と分け、それぞれを社会の横系と縦系として棲分けてことを進めるといった、近代社会が一般にやってきたような運びでは、次の時代を創造することは難しく、もう少し次元の高い、各分野間の系統的連携を基本にしたネットワーク社会の構成に進む必要があるように思います。そのためには、ネットワークの中核的構成員は連携のための複数の腕を個々人で持つ必要があります。諸君も今日まで学んできた自己の専門性と、もう一つ

別の世界を我がものにして、ネットワーク社会の中で孤立しない「複数の腕」を持った人になることが求められてくるように思います。そのためには、従来の縦割り社会に効率よく対応することを目標として、大学が今まで用いてきた伝統的な学部・学科制度の下で学んできた成果を出発点としつつも、複合型の知識がどうしても必要な次の時代の専門家としてもう一つの世界を持つための、新しい勉強を始める必要があると思います。英語で、卒業式のことを「始める日」「Commencement Day」、とうとうと同じことで、諸君達の一人一人がこれからの社会に必要なとされるであろう多面的な資質を具え、自分自身の生涯を創造的に作っていくための本当の勉強を始める決意を、今日してください。

科学技術・社会システムの基本についてさえ一〇年を出ずに新たな基礎知識を付加しなければならぬ状況が来つつあるこの文明の転換期にあつて、社会人となつてからも、学問の基礎的な展開と先端的な成果を体系的に学び続ける生涯学習を、これからの生き方の軸に置いて欲しいものと思います。

近代の閉塞を乗り越え、新しい文明を拓こうと、様々な壁に向かつて我々の社会は挑戦しています。閉塞に瀕している近代を乗り越えた次に来る新しい時代の担い手となるのは諸君です。「市民社会の中の人の支え合い」「地球社会の様々な生物との共生」をどう具現するかは、人間中心のヒューマニズムと人は動物の単なる一種にしか過ぎないというエコロジーの考え方の相克という倫理上そして技術上の重い問いかけをも含んでいるように思います。この蔓延りすぎた人間を「人間こそは」というルネッサンス以来の精神のみで見たいけば、自然の報復を直ちに受けるであろうことを具体的に感じるこの時代です。また、「人間は生物の一種にしか過ぎない」というエコロジーの考え方のみを強く押し進めれば、人類の数と活動度の減少が一義的に要請されることになるでしょう。「調和」を求め続けることは、ただひたすらな正義を求めることよりもはるかに難しく、個々人の忍耐と能力を持続的に要求することです。

この困難の中から人類の未来、この国の人々の未来を導いていくことが諸君の仕事です。自分のためだけに、学問をしてきたではありません。「人と競争することなく、自分のやり方を静かに鍛え」、「いささかの躊躇を常に持ちつつも、自らの力と判断を拠り所として」、未来に向かって歩き出してください。この大学の伝統、Be Ambitious<sup>1)</sup>は、困難な時に未来を自らの手で拓いて行く人々のみ、意味のある言葉であるうと思えます。新しい文明への挑戦者として、静かな大志を抱いて人生をしっかりと歩んでいってください。

(『北大時報』五四一)

## 九 北海道大学創基一二五周年記念式典における総長式辞

(中村睦男総長 二〇〇一年九月二十八日)

本日ここに、遠山文部科学大臣、堀北海道知事をはじめ、関係各位多数のご臨席をえて、北海道大学創基一二五周年の記念式典を挙行いたしますことは、私どもにとって誠に光栄であり、また、心からの喜びとするところであります。

本学の一二五年の歴史を振り返りますと、一八七六年八月十四日、学士号を授与するわが国初の大学である札幌農学校の開校式が行われることによって、北海道大学の歴史の第一頁が開かれたのであります。その後、札幌農学

校としての三〇年、東北帝国大学農科大学としての一〇年、北海道帝国大学としての三〇年の時を経て、新制の北海道大学になって、今年で五三年目を迎えております。この間、北海道帝国大学時代には、農学部、医学部、工学部、理学部が順次設置され、理系の総合大学になり、さらに、一九四九年の北海道大学設置の時には、法文学部、教育学部および水産学部が加わっており、文字通り総合大学になりました。今日の北海道大学は、日本最多の一二の学部、一四の大学院研究科および一つの短期大学部に、一万六〇〇〇人の学生と四一〇〇人の教職員を擁する日本有数の基幹総合大学であり、これまでに、社会の各方面で活躍する一〇万人の学士、二万四〇〇〇人の修士および一万六〇〇〇人の博士を世に送り出してまいりました。

もとより本学の一二五年は、平坦な道を歩んできたわけではありません。創基一二五周年記念事業の大きな柱の一つとして、北大一二五年史を編纂しておりますが、歴史の節目節目における先人の労苦に思いをいたさなければなりません。大学の中にあつては、札幌農学校初代教頭として本学に建学の精神を根付かせたウイリアム・クラーク先生、そしてクラーク先生の教えを大木へと成長させるのに与つた札幌農学校一期生佐藤昌介先生、二期生の新渡戸稻造先生、宮部金吾先生の名前をまず挙げなければなりません。とりわけ佐藤昌介先生は、一八九四年に札幌農学校長に就任して以来、東北帝国大学農科大学長を経て、一九三〇年に北海道帝国大学総長の地位を去られるまで、三六年以上にわたつて、札幌農学校の財政基盤と人事の拡充、農科大学への再編、そして帝国大学の設置という大きな仕事を一身に担つてなし遂げられました。激動の時代にあつての佐藤総長の大学人としての姿勢は、一九二六年に挙行された創基五〇周年記念式典での式辞の中で述べている次のような言葉に表れております。それは、「教育八永遠ニ巨ル生命ヲ有スルモノニシテ一時ノ政策ノ波動ニ依ツテ消長ヲ来スベキモノデ御座リマセヌ」という確固たるものであります。

北海道大学は、また地域社会によつて大きく支えられてきました。帝国大学設置運動における地元の皆さまから

のご支援および財界からのご寄付、さらには、敗戦直後の一九四六年に法文学部設置にあたって、教職員と学生が一体となって全道各地で行った鉛筆運動と呼ばれている募金運動への北海道民の皆さまのご協力など、あらためて深甚なる感謝の念を覚えずにはいられません。

本学は一二五年の歴史のなかで、「開拓者精神」、「全人教育」、「国際性の涵養」という教育研究の理念を培ってまいりました。これら三つの理念に「実学の重視」というクラーク先生の遺訓を加えることもできます。二一世紀の初頭にあたって、国立大学は大きな転換の時期を迎えておりますが、北海道大学が国際社会のなかで教育および研究の両面で独自の存在価値を有する大学であるために、こうした教育研究の理念を改めて確認するとともに、今日的な意味を付与していかなければならないと考えております。

開拓者精神は、学生および研究者が、それぞれの時代の課題を引き受け、新しい道を切り開くことであります。現在、研究組織や大学院研究科の再編を目指して具体化を鋭意検討しております構想として、第一に、旧来の学問体系を超える研究領域の創成を目指した研究を推進するとともに、中長期的な視野で部局横断的な研究体制を企画立案するための全学的な機構である創成科学研究機構の新設、第二に、情報科学にかかわる理工系、医学系、人文社会系の分野を再編して、新しい情報科学の教育研究組織をつくる情報学フロンティア研究科の新設、第三に、大型計算機センターや情報メディア教育研究総合センターを統合するとともに本学の情報インフラを支える情報基盤センターの設置、第四に、バイオサイエンスに関わる新しい研究科の設置、第五に、法科大学院やビジネススクールなど高度専門職業人養成のための専門大学院の新設などありますが、これらは、開拓者精神をもって取り組まなければならない課題であると認識しております。

全人教育は、本学が長年にわたって力を入れてきた教養教育の目指すところでもあります。新渡戸稲造先生も、大学の使命を語るなかで、札幌農学校は、「農業の専門家を造るのが目的ではなく」、「開拓というの、必ずしも

土地ばかりの開拓ではなく、「人文の開拓もあつた」として、あらゆる方面で活躍する人材養成の重要性を指摘しております。本学が大学院重点化大学として大学院教育の一層の充実をはかるとともに、国際的レベルの研究水準を維持していくことは当然の責務であります。そのためにも本学の伝統である教養教育と基礎教育の改善を重ねることによつて、異なつた専門に共通する基礎知識や技能を着実に修得すると同時に、主体的かつ総合的な人格を有し、全人的な教養を身につけた人材を養成することが必要であると考えております。学生の論理的思考力と表現能力を訓練する初年時における一般教育演習や論文指導の充実、さらには課外活動を含む学生の修学環境の整備は、取り組むべき重要な課題であります。

国際性の涵養につきましては、教育の面で改善すべき問題があるといわざるをえません。現在、本学で学ぶ留学生の数は七〇〇人に達しておらず、基幹総合大学としての本学の受け入れ能力からみても、新たな推進策を講ずる必要に迫られております。また、本学から外国へ向かう留学生は、学生の外国への関心が高いのにもかかわらず、国の奨学金を得ている者はようやく、二桁に届く数に過ぎず、これに私費による者を加えても三桁には達していません。学生交流協定を締結している大学の数が少なく、特に、英語圏の大学との協定校が八校と少ない数字になっていることが、本学から留学生の数が伸びない大きな原因の一つであるといえます。協定校の適切な拡大を図るとともに、本学学生の外国語コミュニケーション能力を高め、異文化理解を深める教育の仕組みを早急につくり出さなければなりません。

実学の重視は、事実・実践または応用・実験を重んじる学問上の立場であると考えております。本年四月に農学部附属の演習林、農場、植物園および牧場、理学部、水産学部に付属する臨海実験所などの教育研究施設を統合して、北方生物圏フィールド科学センターを設置することができましたが、ここにも実学の重視の伝統が引き継がれております。

最後に、本学が地域社会や同窓生との交流を願いつつ、一二五周年記念事業を行うなかで、二つのことを紹介させていただきます。一つは、本学の誇りでありますキャンパスの自然の創生であります。すでに平成ポプラ並木植樹を完了しておりますが、引き続きサクシユコト二川を再生し、札幌市の協力をえて、自然の川が流れるキャンパスを創ることにしております。本学の構内が学生、教職員はもとより、市民の憩いの場になるよう環境の整備に務めていきたいと考えております。二つ目は、「遠友学舎」の建設であります。一八九四年に新渡戸夫妻が設立し学生と教員のボランティア活動によって運営された遠友夜学校の精神を受け継ぎ、本学の学生、教職員と、同窓生や市民との交流の場として活用されることを願っております。

時代の大きな転換期にあたって、私どもは人材の養成と基礎研究という本来の使命を果たすとともに、広く社会に開かれた存在であるように懸命に尽力しております。文部科学省をはじめ、本学を今日まで支えて下さいました地域社会や経済界、さらに同窓生をはじめとする本学に関係する皆さまの変わらぬご支援をお願いして、式辞を結びたいと存じます。

〔『北大時報』五七二〕